



今、全国各地でプロジェクションマッピングが大流行である。このような大きな注目を集めようになったのは、昨年の東京駅修復での祝賀イベントによる。このプロジェクションマッピングには、地域の街興しとして期待されるが、問題も少なくない。行政の见えない規制が立ちはだかっている。観光立国を目指している日本としては、規制の撤廃だけでなく、クールジャパンの新しい柱として世界にアピールし、全国各地の町興しに貢献できる支援体制の確立が求められている。

一斉に開花した日本のプロジェクションマッピング

わが国のプロジェクションマッピングが大きな転機を迎えたのは、なんとといっても、大正時代の原型に復元された東京駅舎で行われた秋と冬のプロジェクションマッピングショー「TOKYO STATION VISION」(2012年9月)と「TOKYO HIKARI VISION」(同年12月)の2つであろう。

大手新聞社の記事検索(検索日は、2013年8月23日)で調べてみると、記事は2013年に急増している。「プロジェクションマッピング」の記事は、朝日新聞では2011年に1件、2012年に1件、2013年に25件であった。日経新聞では、2011年に1件、2012年に15件、2013年に33件であった。

プロジェクションマッピング(Projection Mapping)とは、パソコンで作成したCGとプロジェクターの様な映写機器を用い、建物や物体、あるいは空間などに対して映像を映し出す技術の総称をいう(ウィキペディアより)。

最近のプロジェクションマッピングは、特に3Dプロジェクションマッピング(立体物に平面映像を投影する方法)と呼ばれる場合が多いが、これは複雑な形状の3

次元の物体に、多彩な投影ができるようになったからである。

この 3D プロジェクションマッピングと呼ばれる立体映像が迫力のある音楽と共に、建物に投影され、幻想的な世界を観客に見せられるようになったことが、注目を集めている大きな理由である。東京駅駅舎への投影では、超高輝度プロジェクターが 46 台使用され、迫力ある映像を披露したのである。

このイベントは、全国各地の歴史遺産である神社・仏閣・城から公共施設、商業施設、テーマパーク他、様々な建造物にまで及んでいる。

ちなみに、この一部を紹介すると、神社仏閣(知恩院、檀原神宮、護国寺...)、城郭(鶴ヶ城、会津若松城、姫路城...)、公共施設・商業施設(大阪万博、門司港駅、横浜造船所跡、カレッタ汐留...)、テーマパーク(ハウステンボス、ユニバーサルスタジオ、東京ディズニーランド...)、その他(びわ湖毎日マラソン大会、さっぽろ雪まつり、千葉ロッテマリーンズスタジアム...)、などなど多数である。

このプロジェクションマッピングのショーでは、東京駅やさっぽろ雪まつりのように、来場者数が多すぎて危険ということで、中止になったものもある。まさに、異常な人気になっていることを示唆している。

プロジェクションマッピングの歴史と多様な世界

プロジェクションマッピングで先行したのは、ヨーロッパである。まとまった報告はないが、種々の資料を整理してみると、1990 年代末頃から先駆的試みが始まり、2005 年頃から広く関心を集め始め、2009 年頃にブレイクとしたとよい。

わが国では、「プロジェクションマッピング」と呼ばれることが多いが、欧米では「ビデオマッピング」「マッピングプロジェクション」、「ビジュアルマッピング」「アーキテクチャルマッピング」などとも呼ばれている。

歴史的には、3D プロジェクションマッピングの前に、2D プロジェクションマッピングの時代があり、それ以前にもアナログのフィルムプロジェクションの時代があった。その原型は、1969 年のディズニーランドのホーンテッドマンション(Haunted Mansion)に遡るといえる(英語版ウィキペディア)。

わが国では、2000 年代に入って、プロジェクションマッピングへの取り組みは始まっている。例えば、長谷川章によるデジタル掛け軸である。

同氏のウェブサイト(<http://dk.popculture.jp/rec2003j.html>)の報告によれば、2003 年から毎年、海外も含め各地の著名な施設や文化遺産で、プロジェクションマッピング(写真掲載付きで)を行ってきている。

このデジタル掛け軸は、「日本人の持つ無常の精神とデジタル技術を融合した芸術作品」として、2010 年 11 月、アジア大都市ネットワーク 21 東京総会にあわせて、東京都庁ビルに映像が投影され話題となった。

わが国で話題として取り上げられたものに、オリンピックでのプロジェクション

マッピングがある。北京オリンピック（2008年）やロンドンオリンピック（2012年）の開会式での模様が紹介されている。

また、2010年11月には、ディズニーの3D映画「トロン：レガシー」の公式プロモーションで実演されている。東京の明治神宮外苑聖徳絵画館で行われたプロジェクションマッピングは、TV番組やYouTubeでも紹介されていた。

さて、プロジェクションマッピングは、上述のような集客効果を狙う屋外型のものだけでなく。劇場の舞台やライブコンサート会場などでの演出効果を狙う屋内型のものもある。これから、広く利用されるようになると思われる。

屋内型には、フジTVのドラマ『女信長』、シルクエロワーズによるスーパーサーカス『iD』、歌手 Perfume のライブパフォーマンスなどなど。屋外型と屋内型とを組み合わせるものに、増上寺でのきやりーぱみゅぱみゅのライブコンサートがある。

さらに、建造物や舞台への映像投影では無く、人体、家具、絵画、楽器など投影するプロジェクションマッピングもある。人の体や顔に投影するものは話題を集めており、それぞれのウェブサイトや動画共有サイトで視聴することが出来る。

プロジェクションマッピングをクールジャパンの柱に

さて、日本の外国人観光客数は、観光庁によれば、2012年度末で、835.8万人に留まり、目標を大きく下回っている。政府は、日本への外国人観光客の目標を、2016年に1800万人、2030年までに3000万人までにと目標に掲げているが、現状のままでは、その達成は難しい。

東南アジア諸国は、日本以上に外国人観光客の誘致に積極的であり、実際、日本よりも大きな成果を挙げている。例えば、韓国は、2012年11月には、1000万人の大台を突破(観光公社発表)しており、日本を160万人以上も引き離している。

各東南アジア諸国と比べてみると、日本が震災で訪日観光客数が大きく落ち込む前の年(2010年)の統計で比較しても、日本はアジア内で8位に留まっている。ちなみに、世界全体では30位に過ぎない。

観光立国を目指す日本が、外国人観光客の獲得に成功していないのは、いくつかの原因があるが、その一つが、夕方以後の夜の観光が貧弱な点にある。短い滞在期間を有効に活用したい観光客にとって、これは致命的といってよい。

京都や鎌倉といった観光地でも、夕方の4時から5時の間に、寺院仏閣の多くは閉鎖され、周辺のお土産屋さんやレストランも店じまいしてしまう。人通りが無く寂しく暗い街並みは、観光客にとっては興ざめ以外の何ものでもない。

ただし、地域によっては、これまでに夜間のライトアップで集客に成功している例もある。たとえば、神戸のルミナリエ(1995年～)、東京のミレナリオ(1999年～2005年)と光都東京ライトピア(2006年～)である。

これらは、独特の幾何学模様のイルミネーションで通りや広場を飾り、昼間とは

異なる明るい風景を現出させて、その景観を楽しめる。神戸のルミナリエでは、約2週間の期間中に毎年約340万人（過去3年間）が訪れるという。

また、工業地域やコンビナートでの夜間照明を楽しむ「工場萌え」を楽しむ人たちが、2000年代半ば頃から増えている。これを受けて、尼崎市では市民グループにより2004年から、千葉市では県の観光課が2007年から、北九州市では2010年より、それぞれ見学ツアーを開催している。

屋外のプロジェクションマッピングの魅力は、なんといっても夜の集客効果である。全国の自治体にとって、夜の観光の目玉になる。仮想現実の作り出す幻想的なデジタル映像は、これまでの文化遺産や施設に新しい魅力を付加させている。

ただし、プロジェクションマッピングの実施には、行政の見えない規制の壁が立ちだかっている。例えば、屋外や公共施設でのイベントでは、屋外広告物条例や道路交通法による規制がある

日本一の観光地である京都市も例外ではない。京都市美術館で2012年10月にプロジェクションマッピングが行われたが、広告作品か芸術作品かを巡り、京都市側と主催者側で、対立したのである（京都新聞、2013年2月4日）。

確かに、これまでの夜間での建物へのライトアップや都市照明は、難しい問題を抱えている。省エネ化に逆行、過剰な美化、光害などの問題も、指摘されてきている。プロジェクションマッピングは、映像だけでなく大きな音も伴う。

これらの問題をクリアする方法として、注目すべきが、金沢市の夜間景観形成条例である。この条例は2005年に施行され、地域の特性に応じた良好な夜間景観づくりを進めてきている。この条例は現在にふさわしく見直しが進められている。

その結果、2011年には都市照明の世界的表彰「第9回シティ・ピープル・ライト賞」で第3位となっている。新年度は夜間景観の魅力向上に向けて、文化施設のライトアップや、建物に映像を投影する「プロジェクションマッピング」の導入などを検討していくという（北國新聞、2013年1月15日付け）。

プロジェクションマッピングの普及と地域の活性化には、行政の積極的支援が不可欠といつてよい。わが国のプロジェクションマッピングの技術は、高いレベルに達している。例えば、前述の長谷川章氏による独自のデジタル掛け軸である。2013年6月には、六本木ヒルズ3DプロジェクションマッピングのウェブサイトTOKYO CITY SYMPHONYは、第60回カンヌライオンズ国際クリエイティビティフェスティバルで銀賞を受賞している。また、歌手Perfumeのプロジェクションマッピングを取り入れたライブパフォーマンスが、世界中から大きな注目を集めている。

また、プロジェクションマッピングの技術の普及と人員育成には、民間のプロジェクションマッピング協会が、2011年7月に設立されている。

このような日本でのプロジェクションマッピングの活動を、これまで世界から注目を集めてきているクールジャパンの一つに組み込み、更なる活性化が図れるように、政府や自治体の支援が期待される。

(TadaakiNEMOTO)